

平成 27 年 9 月 27 日放送

富山教区 水橋組 照蓮寺 藤枝卓哉

9月の仏教行事として「お彼岸」という行事があります。インドで生まれた仏教ですが、このお彼岸という行事は日本独特のものようです。あるお坊さんがおっしゃった言葉がもとになっているといわれます。「日が真東から昇って真西に沈む。阿弥陀さまのお浄土はその日の沈むところにある。」彼岸とはあちら側の岸と書きますが、極楽浄土を指します。

真西に日が沈む春分の日と秋分の日には阿弥陀さまが建てられた極楽浄土を偲ぶようになりました。極楽浄土はとても広く、限りがないといわれます。

広さに限りがないということは、定員が決まっておらず、条件をつける必要がないともいえます。

極楽浄土をそれだけ広くつくられたのは、阿弥陀さまの慈悲の心がそこに現れているのです。誰一人ももらさずに極楽浄土に生まれさせてやりたい。その心が形になったのが、広大な世界、極楽浄土なのです。

限りなく広い世界にはもう一つの性質があります。それは境界線がないということです。ここまではこっち、この線より向こうはあっちという風にです。最近賑やかになっている尖閣諸島や竹島の領有などは、どこに線を引くかというところから始まっています。県境に現れたクマを他県側に追い払ったという事件もありましたし、隣の家と庭木の葉っぱ等で喧嘩になることも多々あるでしょう。家族の中ですら、山のように線が引かれています。

宇宙飛行士の野口さんは「宇宙からみた地球には、国境はありません」とおっしゃいました。もともと境界線がないのに、あっちとこっちを分けるためにわざわざ線を引くのは、私たちです。そうやって常に相手と比較しながら、生きているのが私たちなのです。

その私たちに向けて阿弥陀さまは境界線の引かれぬ極楽浄土をつくってくださいました。そのはたらきはあらゆるものに平等で、生前の行いや容姿、財産や地位など今の私たちが気にするようなことに左右されることはありません。境界線がなく自分と相手とを比べることはなく、それによって争うこともない世界に生きることができるのです。全てのいのちが安心して生きることのできる世界、それが極楽浄土なのです。

あるご門徒さんの話をします。そのご門徒さんは家で犬を飼っておられました。タロという名前の犬でした。ご主人を亡くされてから一層タロへの愛着が増して、毎日大事な家族として生活しておられました。家にはじめてきた時は小さくて元気に飛び回っていたタロも歳とともに段々と視力が弱くなって、家の中を歩くのもやっとでした。ちょっとした段差につまづいたり、トイレが間に合わなかったり等いろいろ変化が見られるようになりました。

「毎月お医者さんから薬をもらってくるんです。毎日4種類も飲んでるんですよ。」

聞けば聞くほど犬は人間と同じだと思いました。

今は14歳で、人間の年齢だと80歳をちょっと過ぎたくらいだそうです。

ご主人の月命日のお参りをしていると、必ず私の隣で座っていたのですが、その元気もなくなったようです。

そして、先日お邪魔したときに、「こないだタロが亡くなりました」とのお話をされました。その最期の様子を涙目で語っておられる奥さんの姿は、我が子が別れたかのように、悲しみつつも懐かしむようで、犬でありながら本当に家族として接しておられたんだなと思いました。

そのときにご門徒さんから一つ質問がありました。

「ご住職、ひとつ教えて下さい。タロと私は死んで行くところは違うんですか。」

ご門徒さんの切実な思いがそこには詰まっていた。あの子は救ってもらえたんだろうか。また出会えるんだろうか。そういう思いが込もっていました。

以前、その疑問について、ある先輩がこうおっしゃっておられました。

「仏教の教えは人間の言葉で人間に向けて説かれている。じゃあ人間しか助けられないのかということそうじゃない。いろんな生き物には、ちゃんとその生き物にわかる方法や手段で救いが届いているんじゃないだろうか。」

そのように先輩はおっしゃいました。

阿弥陀さまの世界、極楽浄土は線を引かない世界であり、人間だから、犬だから、と差別をするような世界ではありません。全てのいのちがそこに生まれ、また再会することのできる世界なのです。

私はタロを亡くしたご門徒さんに、こうお返しました。

「寂しいけれど、これが最後の別れじゃないですよ。遅かれ早かれまた会える。よかったね」

葬儀の場に立ち会う機会で、司会のアナウンスや弔辞の中に「永遠の別れが参りました」という言葉をよく聞きます。非常に寂しく残酷な言葉のように感じます。永遠の別れであるならば、せっかくその方と関わったご縁は何だったんでしょう。死んだら一人ぼっちで、虚しい世界に連れて行かれるのでしょうか。阿弥陀さまの慈悲がつくられた極楽浄土は決してそのような世界ではありません。

私たちはいつの日か訪れる死から逃れることはできません。それゆえに、永遠の別れや虚しい世界をイメージしてしまうのだろーと思ひます。あの世はわからない世界で不安だから、年をとったり病気になるのを怖がり、死ぬことを少しでも遠ざけようと必死に抵抗します。それは私たち自身が自分の価値観でこの世とあの世に境界線を引いている状態なのかもしれません。

そして、どうせなら死ぬ直前まで健康で、自分の好きな人たちに見守られて、あとの心配がなくなってから死にたい等、いろんな欲張りな願望が増えていくのです。もちろん全て思った通りにはいくわけがありません。自分のこうあるべきという境界線で自分が苦しんでいるようです。

だからこそ、極楽浄土は境界線を引かない世界なのでしょう。私たちの願望や行いに左右されることなく、私たちがはからいを超えて、あらゆるいのちに平等に救いをもたらします。比べることもなく、争いもない、安心して生きることができる世界、極楽浄土は私たちのために阿弥陀さまがつくられたのです。